

コロナ禍における初年次教育の組織的展開 —「自立と体験1」の経験から—

菊地滋夫¹・鈴木浩子²

明星大学

Organizational Deployment of First-Year Experience during the COVID-19 Pandemic: Learning from the Experiences of “Jiritsu to Taiken 1”

Shigeo KIKUCHI · Hiroko SUZUKI

Meisei University

1. 序論 初年次教育とコロナ禍

(1) 初年次教育と大学教育の組織的展開

2000年代以降の教育改革に見られる特徴の一つは、大学教育の組織的展開が本格的に開始したことであろう。筆者らが所属する明星大学でも全学的な初年次教育科目の導入に向けた検討が2008年度よりスタートし、2010年度には学部学科横断クラスを最大の特徴とする全学初年次教育科目「自立と体験1」が開講した。学部学科横断クラスを編成して初年次教育に取り組む大学はその後も徐々に増えており、2020年現在、明星大学のみならず、私立大学では、日本大学、京都産業大学、神戸常磐大学、東京家政大学などが、国立大学でも九州大学などが、それぞれ特色ある学部学科横断型初年次教育を実施している。

コロナ禍によって初年次教育が受けた影響や、それを乗り越えるために試みた方策について記述し、そこから気づきや発見、教訓などを導き出そうとする際には、この大学教育の組織的展開という文脈に留意する必要がある。組織的な取り組みだからこそのこともあれば、組織的な取り組みゆえの困難もある。明星大学の全学初年次教育は、まさに全学的な取り組みであるだけに、これらが顕著に表れている。小稿は、コロナ禍により遠隔授業での実施となった「自立と体験1」の取り組みを紹介し、気づきや発見、ポストコロナの初年次教育にもつながる可能性のある知見などについて共有する機会としたい。

(2) 顕在化した教員の多様性と初年次教育の役割

コロナ禍の中で「自立と体験1」が直面した問題の一つは、遠隔授業でのアクティブラーニングをどのように実施するかという点であった。日頃から自分が担当する授業をアクティブラーニング形式で実施してきた教員にとっては、自らの知識や経験に基づいて、それらを遠隔授業に適合する形にアレンジすることは不可能ではなかった。だが、共通シラバスに則り、共通教材を用いて、70もの学部学科横断クラスを展開する「自立と体験1」

¹ 明星大学人文学部 kikuchis@ge.meisei-u.ac.jp

² 明星大学明星教育センター suzu.hiroko@nifty.com

では、教員のスキルの多様性が顕在化しやすい。すべての担当教員に対して、一律に「Zoomでブレイクアウトセッションを実施してください」と言えば済む問題ではなかった。

他方、2,100名もの新生は入学式に参加できず、当面の間、遠隔授業を受講することが決まっていた。新生が学内に人間関係を築くのは難しく、孤独な状況が続く可能性が危惧された。初年次教育は、その真価が問われることになったのである。多様な担当教員に配慮しつつ、新生を明星大学に迎え入れ、一人ひとりがこの大学に学ぶことの意味を考えられるようにするにはどうすれば良いのか。それは、この授業を企画・運営する明星教育センター(以下 MEC)にとって、かつて経験したことのない大きなチャレンジであった。

2. コロナ禍の中での初年次教育の実践事例

(1)「自立と体験1」の授業概要と2020年度当初の実施予定

「自立と体験1」は、1年生前期全学共通科目として、2010年度より実施されている。2020年度当初の授業概要は、次のとおり予定されていた。

○授業情報：1年次必修科目、学部学科混合30人、全70クラスで実施、2単位。

○担当者：専任・常勤・特任教員および非常勤教員48名。各クラスにチュードレントアシスタント(SA)1~2名。

○教育目標：明星大学に学ぶ学生としての自己理解を助け、各自の理想や目的を明確にしていくこと。

○到達目標：他者との関わりを通して自己理解を深め、明星大学で学ぶ自分自身を理解すること。

○授業内容：「自己理解」「人と関わる力・考える力」「自校学習」「キャリア形成」

○授業の進行：各回は、体験(個人で考える⇒グループで話し合う)・振り返り(ポートフォリオに記入)を基本の進行とする。

15回の授業は、「人と関わる」「人と関わる・学びのスタートを切る」「大学生活を見通す」の3節で構成されている。

(2)2020年度の対応状況

①学内の新型コロナウイルス感染症対応状況

新型コロナウイルス感染症蔓延の影響を受け、2020年度前期の授業実施は大きな転換を求められることとなった。明星大学では、学長より授業を明星 LMS (manaba) と遠隔会議システム Zoom (科目担当教員の判断で選択し併用可) により開始する方針が示された。実際の授業は4月22日に開始され、当初は前期中の対面授業実施が模索されたが、その後の感染状況の悪化により、「実験科目」「実習科目」のみ「集中講義形式」で対面授業を実施、「講義科目」「演習科目」は「対面授業に代わる教育方法によって授業を完結」することが決定された。これにより前期授業は全13回の実施をもって完結することとなった。

②「自立と体験1」の新型コロナウイルス感染症対応状況

「自立と体験1」は、その授業の性格から対面での実施が望ましく、また70クラスで運営し、多くの担当教員が関わる授業であるため、当初は授業実施自体が危ぶまれる状況であった。しかし、不安と孤独な状況にある1年生に、少しでも安心感や大学との接続を感

表1 担当教員向け連絡(2020年度「自立と体験1」授業実施方法について)

発信日	タイトル	主な内容
3月27日	第1報	・対面授業開始までの授業内容はMECで検討する。
4月6日	第2報	・授業内容は、基本的にMECで検討し提示する。
4月17日	第3報	・第1回～第3回の授業内容(学生への連絡内容)詳細。 ・今後の担当教員への依頼内容詳細連絡 ①学生への質問対応/②LMSでの授業連絡内容(基本形は入力済み)
4月28日	第4報	・第1回～第3回授業実施状況とフィードバックコメントの依頼 ・全13回の授業展開案の提示
5月28日	Zoom アンケート	・前期対面授業実施が無くなったことから、担当教員へZoom利用に関するアンケートを実施。Zoom利用の意向を尋ねた。
6月8日	第5報	・Zoom利用について(各自の意向に沿った導入を依頼) ・全13回の授業展開案の提示/・SA配置の中止について
6月29日	第6報	・学生出席状況入力の依頼/・成績評価方法の説明 ・担当教員アンケート協力依頼
7月14日	第7報	・前期授業終了にあたっての挨拶 ・担当教員アンケート・成績入力・出席状況入力の依頼

じられる場をつくるために、どのような形態であっても授業を実施する必要性があった。そのため、授業を実施しながら方針をつくっていくこととなり、3月27日から7月14日までの間に、明星教育センター長名の文書を7回発信した。経緯は表1のとおりである。

2020年度の担当教員は48名(各学科専任教員38名, MEC特任・常勤教員7名, 非常勤教員2名, 明星高校教諭1名)であった。各学科専任教員は、それぞれ自学科での非対面授業の対応に追われており、「自立と体験1」の実施にあたっては、情報を詳細に早めに連絡し負担を減らすことを心がけた。また、当初よりMEC教員が各担当教員を担当しサポート・質問対応等に当たる仕組み(グループリーダー制)があったが、今年度はよりサポートを厚くした。オンデマンド授業の説明(コースニュース)、レポート課題の基本形をMECより一括して提供、課題設定もグループリーダーが行った。

Zoom利用についての事前アンケートでは、「利用したい」10名、「検討してできそうであれば利用してみたい」22名、「利用はむずかしい」4名、その他5名であった。ある程度のサポートがあれば実施できる教員が多かったため、「Zoom利用について(基本の考え方)」を示し、希望者に向けて相互練習会を実施した。ブレイクアウトルームの活用を中心としたこの練習会は3回実施し12名が参加した。最終的にZoomを利用して授業を行った教員は48名中32名、全70クラスのうち53クラスで1回～5回のZoom授業が行われた。

③実際の実施内容

最終的に実施できた13回の授業は、表2のとおりであった。

当初後半に対面授業実施を探ったため、オンデマンドで授業実施が可能と考えられる授業回を前半に移動させ、対面で実施することが学習目標の達成に繋がる内容を後半に据えた。また非対面授業では実施が難しい授業回は、実施しなかった。

1回～7回までは学生に郵送したポータルフォリオ(冊子)とLMSによるオンデマンド型で実施した。9回以降は、オンデマンドでの実施を基本としながら、Zoomを活用しより

表2 2020年度「自立と体験1」実施内容

回	授業名	通常	実施方法・実施内容
1	オリエンテーション①	1	・PROGの受検・授業アンケート回答
2	オリエンテーション②	1	・ポートフォリオ学習。学ぶ力自己点検①・振り返り(LMS)
3	新しい環境で他者と出会う・大学での学びを考える	2	・ポートフォリオ学習。振り返り(LMS)
		3	・LMSレポートの相互閲覧の推奨。
4	明星大学を知る	7	・動画「母校を知る」「学長メッセージ」視聴。 ・レポート課題記入(LMS)
5	聴いて相手を理解する	4	・ポートフォリオ学習／・レポート課題記入(LMS) ・掲示板「私の好きな○○」相互質問
6	ルールとマナーを考える①	6	・ポートフォリオ学習／・LMSプロジェクト欄に意見記入・相互閲覧／・レポート課題記入(LMS)
7	自分や相手の大切さを知る	11	・第6回プロジェクトの他者の意見を読む ・ポートフォリオ学習／・レポート課題記入(LMS)
8	ルールとマナーを考える②	6	・レポート課題(LMS)：コロナ禍の中でのルールとマナーについての自分の意見を書く
9	明星大学を紹介する	8	・第8回レポート他者意見を読む／・レポート課題(LMS)
10	卒業生から学ぶ	12	・第9回レポートの他者の紹介文を読み考える
			・ポートフォリオ学習／・レポート課題(LMS)
11	自分の特徴を知る	13	・第10回レポートで他者の意見を読む ・学ぶ力自己点検②／PROGによる自己分析／・レポート課題(LMS)
12	これからの大学生活を描く	14	・レポート課題(LMS)：なりたい自分・今の自分・学年ごとにやるとよいと思うこと・全体振り返り
13	未来の自分へのメッセージ	15	・レポート課題(LMS)：授業の意味づけ・全体振り返り
			・掲示板にクラスメンバーへのメッセージ記入(任意)

(ポートフォリオ学習・明星LMS)

(オンデマンド・Zoom併用
教員判断でZoom利用)

学習を深めたい学生たちに対面に近い形での授業を提供した。その際、各クラスによりZoomの活用状況が異なったため、オンデマンド授業のみで、当初予定した教育目標が達成できるように授業を組み立てた。均一のZoom利用としなかったのは、担当教員ごとにZoom授業への習熟度が異なる中で、短時間の研修のみで均一のZoom利用を実現することが難しかったためである。結果的には、この「無理のない範囲でZoom授業を行って頂

く」という方法は、授業の組織的展開において、トラブル無く Zoom 授業を行うために役立つと考えられる。

(3) 非対面授業でのアクティブラーニングの実践

非対面授業であっても、学生が多様な他者とふれあい、主体的に考え、相互に交流し合う「自立と体験1」の特徴を活かしていけるような様々な工夫を行った。また多くの教員が関わることから、個々の教員にすべてを委ねるのではなく、学生が自ら行動できるようにシステム化することを目指した。具体的には次の3点である。

①他者との関わりの中での学び

LMS レポートを相互閲覧可で設定することで、クラスメンバーの記入内容が読めるようにした。また授業課題に前回のレポートの他者意見を読むという課題を設定し、相互閲覧をシステム化した。レポート課題以外にも、掲示板やプロジェクト機能も活用し、他者の意見を読んで考えることを推奨した。

②学部学科混合クラスによる多様性からの学び

上記の相互閲覧にあたっては、自分と異なる意見に着目できるように設問を工夫した。具体的には、「他者のレポートから新しく知って考えたこと」や「自分と異なる学科のクラスメンバーのレポートを読む」等である。

③考える力をつけるための振り返り・概念化

レポート課題の設問は、振り返り・概念化ができるように順を追った内容とし、設問に答えることで「学生が考えること」を促した。具体的には、資料を読んで考えたことは何か、なぜそう考えたのか等の思考のプロセスに沿った設問を設定した。

(4) 組織的展開と個別展開のバランス

ここまでの授業展開の仕組みは、「自立と体験1」を組織的に展開していくために必要な取り組みである。担当教員に事前に十分な情報を提供できない中で、ある程度の共通の仕組みをつくり、それに沿って授業を実施していただくことが必要な状況であった。

また、学生に向けても、5月7日に統一のメッセージとして、MECから「履修学生ニュース【1】」を発信した。その中では、今後の授業の進め方の説明と共に、次のようなメッセージを学生に伝えている。

○ LMS の授業でもクラスメンバーと関わりながら進めます：レポートの相互閲覧はクラス内の自分とは異なる学部学科のメンバーの意見から考えるためにある。

○「振り返ること」「考えること」を意識して取り組んでください：自宅学習だからこそ自分自身を振り返ったり、「なぜ」を考えたりすることが大切になる。

この「履修学生ニュース」は、複数回発信することを想定していたが、結局この1回だけの発信となった。実際に授業を進めていくに従い、個々のクラスごとに特徴が現れ、統一のメッセージを伝える必要がなくなったからである。同時に、MEC内では、各担当教員が個々の特徴を表現する余地を残す必要性を感じていたという面もあった。

担当教員には、毎回授業ごとのコメントを依頼し、クラス全体向けまたは学生個別にフィードバックしてもらった。MEC教員(グループリーダー)は自分のグループの教員のコメントが閲覧できる設定であったが、コメント内容は個々の教員に任せており、コメント方法等について質問等があった場合のみ対応する体制をとった。担当教員がそれぞれの特徴を出してコメントしており、統一のプログラムの中でもクラスごとの特徴が表れていた。

また授業説明のコースニュース、レポート課題は、ひな形を提供したり統一の内容をいったん設定したが、担当教員がそれぞれ内容を確認し追加したり修正したうえで学生に公開することを原則とした。この方法は学生への「公開もれ」等のリスクもあったが、最終的に授業の責任者が担当教員であることを考えると、必要なプロセスだったと考えられる。

次年度以降の授業展開については、詳細が決められない状況が継続しているが、LMSの活用を組織的に行っていく場合に、この個別展開とのバランスは意識して検討していく必要があるだろう。

(5) アンケートから見る成果と課題

① 学生アンケート

「自立と体験1」では毎年授業独自の学生アンケートを初回と最終回の授業時に実施している。自由記述の「この授業を受けてよかったと思う点」には「LMS 課題を通して他学部の学生の意見を知ることができた」「相互閲覧で他の人のレポートが読める」という意見が散見され、非対面授業でアクティブラーニングを実践しようという試みは多少なりとも実現できたようである。一方「この授業で『もっとこうだったら良かったのに』という点」を見てみると、「文字だけでは伝わらない」という意見もある。また「対面だったら良かった」「Zoom をもっと使ったらよかった」という意見もあった。また「自分のクラスでは Zoom を使っていないので交流が少なかった」「全部のクラスで Zoom を使ってほしかった」という意見もあり、教員ごとの選択としたことで、履修者にとってはマイナスの結果となったこともあった。途中から Zoom を利用したクラスに比較して、最後まで LMS のみだったクラスでは、「自立と体験1」の特徴である「少人数クラス」「他学部・他学科の学生との交流」「グループでの学習活動」の有効性を問う設問の肯定的評価が低くなっている。今後は学習効果に関連する部分については、統一の内容・運用とすることが求められる。

② 担当教員アンケート

授業終了後に担当教員にもアンケートを実施した。回答 42 名のうち、学生の行動目標/到達目標が達成できたと評価した教員は 59.5% (25 名) (十分達成できた・だいたい達成できた)、どちらとも言えないが 23.8% (10 名)、あまり達成できなかったが 16.6% (7 名) だった。全く達成できなかったという回答が 0 名だったことから、コロナ禍の取り組みとしては許容できる範囲だったと言えるかもしれない。

「MEC から提供したレポート課題、コースニュース等を、工夫・改善されましたか」との問いには、4 割程度の教員が自分なりの工夫を追加している (定型を利用した 58.5%、工夫・改善したことがある 41.5%)。またグループリーダーのサポートのうち役に立ったと思うサポートについては、「コースニュース(案)の提示」83%、「レポート課題のインプット」86%、「授業実施情報の提供」71%の担当教員が「役に立った」と答えた。特にコロナ禍の多忙の中で、統一の教材提供について肯定的に捉えた教員が多かったようである。「レポート課題のインポートは時間の節約になり、その分授業計画を考える時間ができた」という記述から、今年度の「組織的展開と個別の展開」のバランスは適度であったと考えられる。

3. コロナ禍を受けた今後の初年次教育—結びにかえて—

小稿の結びにかえて、組織的に展開される明星大学「自立と体験1」がコロナ禍に際して直面した課題と、それを乗り越える方策について改めてまとめた上で、今回の経験を踏まえて予測される今後の初年次教育について簡単に述べておくこととしたい。

(1) 組織的展開が直面した困難と打開策

MECは、教員の教育スキルの多様性を認めつつ、2,100名もの新入生の学びを保障するという、困難なミッションに取り組んだ。その中で、授業方法に選択の幅を持たせたことは、無理なく授業を展開する上で現実的な判断であった。LMS課題の相互閲覧や教員によるフィードバックを通じた学習は、一定の効果があったと評価できる。Zoomを利用しなかったクラスでは、「他学部・他学科の学生との交流」や「グループでの学習活動」で高い学習効果は得られなかったが、その経験は次年度以降に活かされるであろう。

(2) 学習データのデジタル化と活用

コロナ禍以前の「自立と体験1」では、冊子状の紙のポートフォリオが活用されていたが、2020年度には、これに加えてLMSが全面的に活用された。学生が各自の考えや振り返りをLMSに記入することで、学生一人ひとりの学習記録がデジタル化され、eポートフォリオとして蓄積された。2008年に始まった「自立と体験1」検討過程の最も初期においては、eポートフォリオの活用が想定されていたが、それが突然のコロナ禍により思わぬ形で実現したのである。デジタル化された初年次教育の学習データは、在学中のキャリア教育の出発点ともなろう。無論、学習データのデジタル化は、初年次教育に限ったことではない。学修者にとって意義ある学習データの活用方法の整備や、学生支援や教学マネジメントに資するラーニングアナリティクスやIRへの活用は、今後の重要課題である。

(3) デジタルファシリテーション

今後重要になることをもう一点だけ指摘しておきたい。それは「デジタルファシリテーション」である(田原, 2020)。アクティブラーニングでは、従来からファシリテーションが重視されてきたが、それは対面での場面に限定されがちだった。だが、デジタルでの学びの長所が認識され、高等教育に積極的に取り入れられる時代になると、ファシリテーションは、対面での学びの場のみならず、デジタルでの学びの領域へと拡大される。例えば、反転授業における事前の動画視聴や、授業時間外にLMSの掲示板などを利用して学生たちが意見交換する場合のファシリテーションなどは、今後ますます重要になるであろう。

(4) 大学間の連携と協力

デジタルファシリテーションを教員が個々に行うのか、それともラーニングアナリティクス担当部署の支援を受けて組織的に行うのかでは、結果は大きく異なる。財力のある大学では、ラーニングアナリティクスを活用した授業改善も組織的にできるが、そうではない大学では、人材の確保などが難しいこともあるだろう。打開の鍵は、大学間の連携と協力にある。初年次教育学会の設立は、こうした流れを先取りしたものであったが、このことは今後さらに求められるだろうとの予測を述べたところで、小稿を閉じることにしたい。

参考文献

田原真人(2020)「デジタルファシリテーション構想(デジファシ構想1)」<https://note.com/masatahara/n/n2ed3a780852f>(2020年12月29日アクセス)